

巻頭言 創刊号へ向けて

飯澤 正登実

 <https://orcid.org/0000-0002-3735-0616>

やまなみ書房

〒 252-0143 神奈川県相模原市緑区橋本 2-7-9 古川荘 201 さがみ進学プラザ内

2018 年 9 月 15 日原稿受付

Citation: 飯澤 正登実 (2018). 創刊号へ向けて. *Journal of Science and Philosophy*, 1(1), 1-5.

ご創刊おめでとうございます。Journal of Science and Philosophy (J. Sci. Philos. または JSP) の制作・発売を担当させていただいているやまなみ書房の飯澤です。編集委員会ではない第三者の立場から本誌をご紹介させて戴きます。

1 JSP の役割

学術誌というものは、学術的コミュニティーの要であります。学術誌が揺らいでしまえばその業界が倒れてしまうため、確固たる運営を行うため様々な工夫が為されているのが一般的です。しかし、時を経る毎に制度は複雑化していくものです。信頼を担保することばかりを意識すれば、運営は硬直化してまいります。硬直化は、業界を担う重責を負う者の宿命と言わねばなりません。JSP はこのような学術誌へのカウンターとして企画されました。

JSP は既存の学術誌のような学問への信頼性を担保する為のものではなく、学術誌の新しいありかたを実験するための学術誌を目指しております。一般の学術誌は信頼性を担保するという性格上、必然的に保守的にならざるを得

ません。一方、JSP は他の学術誌が躊躇するようなことを、実験台として行おうと考えています。例えば、学術誌の要である査読について考えてみましょう。査読は誤謬を排除する機能を果たしていると、本当にいうことができるでしょうか。

ひとつ挿話させていただきます。科学の中でも実験系について話を絞ってみましょう。Nature 誌が 2016 年に公表した簡単なアンケート結果によれば [1]、1500 人強の回答者のうち 70% を越える研究者が、他の科学者による実験の再現に失敗した経験があるそうです。そして、再現できなくても論文の結果を間違っていると考えず、自分の結果よりその論文を信頼してしまうという研究者が大多数で、論文が間違っていると判断を下すと答えた研究者は 31% を下回るそうです。実験の誤謬を査読で振り落とすのは限界があるとはいえ、学術誌というものが形骸化した「権威」に成り下がってしまっていると指摘されかねない事態であるといえます。

さて、このような事態を回避するには、複数の研究者による実験の再現は欠かせません。実験に限らず理論であっても、様々な人による議論が信頼性の担保に欠かせません。信頼性を確保するには、このような自由闊達な議論と再現実験が最も重要なのであって、査読を含めた学術誌の細かい制度は本当は大して重要なものではないのではないのでしょうか。むしろ査読への過度な信頼が、学術誌という空虚な「権威」を作り出してしまっていると言っても過言ではないでしょう。JSP は査読を、投稿者の足を引っ張るためのツールとしてではなく、より闊達な議論を引き起こすための工夫を提供する手段として扱っています。ダメなところをあげつらうのではなく、訂正を促してその論文が発展的な議論を引き起こす土壌となるよう、アドバイスするのが学術誌編集の役割である、というわけです。

2 権威について

とはいえ、これから研究者になろうとしている人や、業績を重ねて昇進していく必要がある研究者にとって、権威的な雑誌に載せ、引用件数を稼ぐことは

至上命題です。生活していくためには、その業界の権威にすがらねばなりません。生き残るために役に立つのは、一般向けの雑誌ではなく、大学の紀要でもなく、また残念ながら本誌 JSP でもないわけです。

物理学で最も権威ある学術誌というと、誰もが速報誌 Physical Review Letter を挙げるでしょう。その論文全体のうち、物理学の研究者は一体どのくらいを読みこなすことができるのでしょうか。Physical Review (Series I) 創刊 100 周年の 1993 年、New York Times は大変刺激的なタイトルの記事を掲載しました。

Physicists Celebrate Unintelligible Journal [2]

「物理学者、理解不能なジャーナルを祝う。」今から遡ること 25 年前のこの時でさえ、New York Times のような一般紙で揶揄されるような状態であったということになります。この傾向は未だ改善されていません。改善する方法はあるのでしょうか。

人に分かりやすく伝えるということは、大切なことです。しかし伝えにくい難しい問題を切り捨てるのは問題です。問題意識がまだはっきりしていないところに、議論の萌芽が見られることがしばしばあるからです。また、誰にでも分かることばかりを記せば、高度な専門性を有する事柄は発表できなくなってしまう。この問題の核は、論文の文体の煩雑さや高度な専門性にはないのではないか。むしろ、惹きつけるもの、新たな予感を感じさせるものが、なくなってきたところに問題があるのではないかと思うわけです。

さて、権威というものは大方「新たな予感」に逆行する指向性を持つものです。不動の安定感が権威たらしめているのであって、それは新たな秩序を抑圧することで得られるものだからです。JSP は、その存在意義からいって権威にはなり得ません。権威からすり抜けたところに存在します。「重石」としての学術誌ではなく、遊びのある場であることを目指しています。

一方、権威というものは業界の安定的な運用には必須の存在です。全面的にひれ伏してしまい権威「主義」となってしまうのが問題なのであって、権威はむしろ積極的に利用すべきものです。そちらは便利な道具として利用させて

もらって、昇進などに関わる「業績」にカウントされにくい萌芽的な議論や討論は JSP で行う。このような立ち位置として JSP を認識して戴けたらよいのだと思います。

3 投稿論文の種類「研究の芽」

ここまで述べてきたように、JSP は学術誌の新しいあり方を実験するための学術誌であるという側面があるため、投稿論文の種類はいたずらに多く、2018 年 8 月 15 日の時点で既に、原著論文、総説、短報、紹介、コラム、研究の芽、討論、Encyclopedia of Science and Philosophy と、8 つもあります。今後も実験すべき種類があれば、その度ごとに増えていくでしょう。

創刊号では「研究の芽」という種別での投稿がありました。これについて説明しましょう。「研究の芽」という種類は、典型的なスタイルの「論文」(原著論文・総説)ではなく、紹介やコラムでもなく、またエッセイとも言えない、いわば既存のいかなるジャンルにも分類できない文章を扱う投稿種別です。それゆえ読者は、何らかの既存の種類やスタイルを念頭において読むことはできません。まだ形式化されず、そしてどこに新たな芽が眠っているかも分からない、そういった未知の土壌を眺め、読者自身が育てていく場として想定されています。

4 おわりのとき

20 世紀初頭に物理学で権勢を振るった学術誌 *Zeitschrift für Physik* は今、存在しません。量子力学の建設を牽引してきた第一級の権威的学術誌でさえ、100 年もせずに消えてしまうのです。JSP もいずれ、終わるときが来るでしょう。この引き際について、制作を担当している私が一言申したいと思います。面白くなくなったらやめましょう。よくある小さな学術誌のように、形骸化した状態で続けても仕方ありません。また、仮に権威となってしまった場合、紛争や権力闘争の道具とされるようになったら本意ではありません。そのときは潔

く退くべきでしょう。

これから、素晴らしい投稿、面白い企画が集まってくることでしょう。いつか来るおわりするとき、投稿した方々の蒔いた在りし日の芽を、振り返ってここに一望することになる。そのときを思いながら、この巻頭言を以て創刊の祝辞に代えさせていただきます。

参考文献

- [1] Baker, M. (2016). Is there a reproducibility crisis? *Nature*, 533(7604), 452–454. DOI:10.1038/533452a
- [2] Browne, M. W. (1993, April 20). Physicists celebrate unintelligible journal. *The New York Times*, Retrieved from <https://timesmachine.nytimes.com/>

This work is licensed under a Creative Commons
“Attribution 4.0 International” license.



© 2018 Journal of Science and Philosophy 編集委員会